

平成29年度卒業式及び平成30年度入学式の学長式辞

石本 勝見

はじめに

平成29年度の卒業式の式辞では、千利休の稽古の教えを紹介し、学びを深めるとは基本を学びその上に一つ一つを積み重ねていくことであり、極めるとは、その経験を基礎にまた一から積み上げていくこと、際限のないプロセスであること伝えた。保育の仕事も同様であり、子どもと共に学び続けてほしいこと、等について伝えた。

また平成30年度の入学式では、建学の精神について触れ、学ぶ意欲、継続する意思の大切さ、また本学の教育目標「子どものために 子どもと共に 学び続ける保育者」について紹介した。

平成29年度卒業式 学長式辞

弥生の空晴れ渡る今日の佳き日、新潟中央短期大学第36回卒業式を挙げるに当たり、御多忙のところ加茂市長小池清彦様、田上町長佐藤邦義様はじめ多数の御来賓の皆様から御臨席いただき誠にありがとうございます。

さて、卒業生の皆さん、卒業おめでとう。ここまで、日々の学習に、幼稚園や保育園、そして障害者の施設等での実習に、そしてミュージカルや様々な教育活動に精一杯頑張ってきました。その努力を心から讃えたいと思います。

いま卒業を迎え、いよいよ社会でこれまで培ってきた力を存分に発揮する時が来ました。様々な不安や心配もあることと思いますが、これまでの学びや活動の中でもうまくいったこともいかなかったことも経験をし、そしてそれを乗り越えて今日の自分があるわけです。たとえ困難に出会ったとしても、苦しみながら悩みながら、時に周囲の人に助けられながらも、そうした経験を通じてより強く成長した自分を信頼して挑戦して欲しいと願っています。

ここで、卒業生の皆さんにはなむけとして、千利休の言葉を贈ります。千利休はお茶をたしなむ人ももちろん、そうでな人にも有名な人であると思います。利休は「稽古と

は「一より習い十を知り 十よりかえる もとのその一」と言っています。稽古すなわち学びとは、まったく基本的な一の段階から初めて、それができたら次の二の段階に、そして三、四と学びを深めていき、ついにはここが最高と思われる十に到達する。この段階で、いわば学びつくした名人になったら、そこで学びは終わりか？いやいやそうではなく、最初の一にまた戻ってそこからまた学ぶ、それが稽古の本質であると、つまり学ぶ、ということはそういうものではないか。その道で達人になる、エキスパートになるとは限りのない学びの連続であり、学びにはこれという終わりはない。学べば学ぶほど自分の無知や未熟さを思い知らされるものです。

翻って、保育や教育の仕事を考えてみても同じことが言えるのではないかと、思います。仕事を始めて数年たつと自分はすべてわかったと思ひ込み、学びの歩みを止めてしまい、はたから見ると独りよがりの教育・保育をしている先生もいないわけではありません。一を学ぶとは、例えば、まずは自分が子ども前に立つことを子どもから許してもらう事ともいえます。初めから先生ではない、子どもが自分を先生と認めてくれる、そして許してくれて「先生」として子どもの前に立ち、子どもと関わる事ができるのではないかと、思います。謙虚に、子どもから学び、子どもと共に学び続ける保育者こそ、私ども新潟中央短期大学が養成したい先生なのです。どうか皆さん、子どもと共に学び続けていただきたい。子どもから、保護者から、そして同僚の先生から教えてもらい、それを自らの成長の糧とする、このこと以外に良い先生、保育者になる道はないと言ってもいいでしょう。どうか皆さん、卒業は新しい学びの新たな始まりです。新しい出発に必要な力は本学で身に着けました。子どもを信じて、自らを信じ、自分らしく前に進んでいってください。人間は幾つになっても発展途上だと思ひます。一步一步、道を踏みしめて進む、立ち止まり振り返る、そして反省点を修正した挑戦し、実践していくという、いわばPDCAサイクルで仕事を進め、成長し続けてください。皆さんがここ新潟中央短期大学で学んだ、身に着けた力を存分に発揮して、失敗を恐れず、失敗から学ぶ姿勢を常に忘れず生きていった欲しいと願っています。そして、また会いましょう。立派に成長された、未来の皆さんにお会いすることを楽しみにしています。

最後になりましたが、保護者の皆様、御家族の皆様、本日はおめでとうございます。本学に対し、皆様のこれまでの御支援に心から感謝申し上げますとともに、これからも温かい御理解を賜りますようお願い申し上げます。

最後の最後ですが、卒業生の皆さんの前途に幸多かれと祈りつつ式辞とします。

平成30年3月15日

新潟中央短期大学 学長 石本 勝見

平成30年度入学式 学長式辞

春の光輝くここ希望が丘のキャンパスにおいて、平成30年度新潟中央短期大学入学式を挙げるに当たり、加茂市長小池清彦様、田上町長佐藤邦義様、元本学学長長塚康弘様はじめ多数のご来賓の皆様から御臨席をいただき、誠にありがとうございます。

ただいま本学への入学を許可された皆さん、入学おめでとう。ここから歓迎します。また、ご家族・保護者の皆様、まずもって本日は誠にありがとうございます。私ども教職員は、全力で学生を支援し教育に当たる決意ではありますが、保護者の皆様におかれましても、本学への温かい御理解と御支援をよろしくお願い申し上げます。

さて、本学の教学の根底にある最も大切な理念は、本学の母胎たる加茂朝学校の精神に求められると思います。大正九年九月、ここ加茂の地に西村大串師が近隣の勤労青年のために学びの場を創設されました。すなわち、学ぶ意欲と意志があるものは、たとえ経済的状況が困難であったとしても仕事をしながら、仕事に行く前の時間、仕事が終わってからの夜の眠りにつくまでの時間に、寸暇を惜しんで学ぶ、学び続けるという精神であります。こうした精神を具体化するために、本学では、経済的に困難な状況にあるものに対して、2年間の授業料を全額免除する本学独自の特別奨学金制度を創設しました。建学の精神に思いをいたし、社会から信頼され選ばれる大学を目指して努力を重ねてまいりたい、と思っています。また、私ども中央短期大学が養成すべき保育者とは何か？校舎が新しくなった今、教育内容のさらなる充実を目指して、その大きな方向性を教育目標としてまとめました。

すなわち、「子どものために子どもと共に学び続ける保育者」であります。この意味するところは、まずもって保育者は、保育に関する活動において、子どもが中心でなければならないこと、また子どもは、日々成長・発達する存在であって、その子どもを護り育てる保育者もまた、子どもとのかかわり、やり取り、様々な保育経験の中で子どもと一緒に学び、伸びていく存在でなければならない、そして子どもの心の中に、新しい可能性が芽生え育っていくプロセスを共に喜び、励まし、保育者自身もまた同じように、自らの中に新しい自己を認めることができる保育者になること、こうした学びや成長を大事にして保育を続ける保育者こそ私ども新潟中央短期大学が育てたい保育の専門職です。

更には言えば、子どもにとって良い保育者とは、子どもを護り育てることは勿論ですが、自らが大きく心を開き、子どもから学ぶ姿勢を常に忘れず、学びつつ実践し続ける保育者でしょう。

この度、私たちは社会に向かって、新潟中央短期大学はこのような保育者を育てます、宣言しました。我々教職員はこうした保育人材養成のために全力を挙げて取り組みます。ここで新入生の皆さんに強くお願いしたいことは、私どもと一緒に、目標とする保育者になるために、高く、揺るがない志をもち、自らが頑張る覚悟を決めていただきたい、という事です。しっかりと覚悟を決めて、目標を定めて2年間努力すれば必ず「よい保育者」として子どもたちの前に立つことができると信じています。

この新潟中央短期大学で、人生で最も輝き、自らの人格形成に大きな影響を与える青春の時に、仲間と共に、また本学の教職員と一緒に、共に学び、学びあいながら、なりたい自分、理想とする保育者に向かって、一步一步進んでいきましょう。
以上、学長としての式辞とします。

平成30年4月3日

新潟中央短期大学 学長 石 本 勝 見